新陀の奉

水上　勉

弥陀の舞

定　価　五八〇円
昭和四十四年二月二十八日第一刷発行
昭和四十四年六月三十日第二刷発行
著　者　水上　勉
装幀・挿画　朝倉　摂
発行者　大田信男
印刷所　凸版印刷株式会社
発行所　朝日新聞社　東京・名古屋・大阪・北九州
©一九六九年　水上　勉

弥陀の舞

その一

越前と若狭の境は深い山である。冬は雪がふかくて、北風が吹きつけるので旅人は難儀した。いまでも、杉津のあたりは波をかぶる細道がのこっていて、峻しい山は海へずり落ちるような早さでつきささってくる。万葉の昔『み雪ふるこしの大山ゆきすぎていづれの日にかわが里を見む』とうたった人がいた。都をとおく離れて、越の国へ左遷されて行った役人でもあろう。難所の山に不遇の身をあずけた心境がみえるようでならない。この大山をこえて、越前平野がひろがりはじめる武生の町の右手をみると、味真野という小さな村がある。風土記に「あじまの郷」と記されている里で、のちの継体天皇である男大迹皇子が、ここの風光を愛して住んだ。

私（作者）が味真野へ行ったのはもう五年前だが、じつは難所の山をくぐりぬけて、ぽっかり割れたようにみえた山合いの景色のおだやかなのに魅かれた。旅の目的はこの村に育った紙漉き女のことが調べたかったためである。それに、もう一つ、味真野のどこかに、一本の物語めいた桜樹があって、淡墨桜とよばれていることにも興味があった。有名な根尾谷の淡墨桜は、やはり継体天皇のお手植えとつたえられ、越美の大山をこえた根尾の里にあるけれども、味真野の桜もやはり巨木だろうか。謡曲「花筐」によると、味真野の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

皇子が、帝の位について村を去るに際し、ねんごろにしていた娘を憐れと思召して、「きぬきぬの都の空は遠けれど心は国に残しおくらめ」といい、一本の桜を山につきたてて旅立った。娘は悶々の日々をおくるに至り、狂女となって名残りの花筐を手にして都へのぼった。謡曲の作者は、この娘を『照日の前』とよび、道中を哀切こめてうたいあげる。物狂いのさめた姫は、やがて、后の地位にまでのぼり、つぎの帝である安閑天皇の母になったとつたえている。千年以上もの大昔に、皇子が植えた桜とは、いったいどんな桜であろう。

武生駅に降りて、粟田部に出、そこから車を捨てて、無案内なままに、刈稲の株が点々とうかぶ縄手道を、うららかな冬陽をうけて歩いてゆくうち、小さな集落につきあたった。五分市という小字で、何げなく通りかかった道傍に『花筐の桜古跡』と立札があった。よくみると、立札のわきに二坪にみたぬ平地があり、直径三十センチあるかなきかの一本の桜が植わっていた。冬のことだから、肌は荒れているし、枝も針のようにとがっていて、これが大昔に帝の植えた桜の名残りかと、呆然としてたたずむしかなかった。役人や道学者のなすことは、みなこのたぐいで、名木も古跡もあったものでなく、しのぶよすがのない形式だけのことであった。

丈は私の背の二倍もないほどの細木だし、枝のシンまでさびれているのを、じっと眺めていると、捨て去られた味真野の娘の物狂いの気持もわかる。柵はなく、車の通りすぎる埃っぽい道ばたである。村童が石蹴りでもしたとみえて、輪のかかれてある根方のあたりへ、ぽうーっと薄陽がたまっているのをみていたら、往時がうかび、狂った娘が花をかざして袖振りあそぶ姿が彷彿してきた。五分市の集落は、この桜のある所からすぐ切れていて、人影のない静かな村道がつづいた。

やがて、右手の森に、大傘をひろげたような寺院の屋根がみえたので、吸いこまれるように入ってゆくと、ここは調べる目的の紙漉き女が、七つ八つまで、お詣りした真宗寺院であった。越前四箇本山の一つ、豪摂寺の境内である。山を背に峻嶽の幽気をふまえる曹洞禅の寺などとちがって、村なかの真宗寺のたたずまいは、どこをみても開放的で、念仏をとなえるだけで、浄土へゆけると信じた善男善女が、手をさしのべればすぐ触れることの出来た廻廊の、木目の出た古い伽藍の下に立っていると、尼の子にうまれた紙漉き女のくみのことや、母のことに思いを馳せないではおれなかった。

くみが乳呑子の時あずけられたのは、味真野の文室の里で、ここは、いま、私が立っている五分市本山から、すこし戻って、越前万歳の野大坪の集落をすぎ、南へ文室川をのぼりつめた山合いだ。冬枯れの野道は縄手から次第に山ぞいとなり、陽かげになってゆく。上大坪、木留、萱谷と小村をすぎて、文室の村にさしかかる頃は、いちめん桐畑であった。谷がふかいので、二、三日前に降りつもった雪のむら消えがところどころ、灰いろまだらにのこっていて、白布の上に棒をつきたてたようにならぶ桐も、葉が落ちて、白樺と見まがうばかりに、背後の杉山から浮いてみえた。

「おめがつれてこられた日ィは、桐の花のまっさかりやった。ほやほや。尼のおっ母が、おめを抱いてござんした」

とくみは、養母のつなから教えてもらったのを、いつまでも忘れずにいたが、桐畑の花の咲くのは、五月だろう。明治六年の五月にも、いま、私が眺めいる鞍谷の野を埋める桐の木はあったのである。桐は道をさしはさむようにして、間隔をつめ、心もち小ぶりになって、せばまる谷をうめていた。

母の尼は善照尼といったが、その顔もおぼえていないほどだから、くみが父の名も顔も知らなかったのは

道理である。ただ、物心つく頃、お前は谷一つ向うの五箇の村の尼さまの子にうまれた。仏縁でここへあずけられたと教えられている。養家は牛蒡もとれる畑に小ぶりの桐を二十本ばかり植えた山裾の屠屋で、笹谷長左衛門といった。養母はつなといい、養父は百姓、炭焼き、よく働いた小男だったが、内職に桐買いもし、出歩くことが多かったので、くみにはこの養父の面影はおぼろげにしかない。つなは肥り肉の大女で、夫に尾いて山へ登ったし、炭負い、木出しなど男に負けぬほど精を出した。肥満体のせいか、子にめぐまれず、ある年の冬、紙漉き村の岩本へコウゾの皮むきに通っていて、部落の尼寺へ身をよせていた善照尼と知りあっている。

寺は岩本のかみの大滝神社の前をながれる大滝川の、コウゾのアクでよごれた水が、日がなぬめり流れる岸に、破れた土塀をみせていたが、この円鏡寺には当時、善照尼の師にあたる覚円尼が住しており、子をなした善照が、ゆくあてもなくて、師の寺へもどり、ヒマがあると、コウゾの皮むき、薪づくりに傭われているうち、つなと面識をもったのである。子のないつなに、善照尼が、どう理屈をつけて乳呑子をあずけるに成功したか、くみは養母からも、くわしくは教えてもらっていない。ただ、桐の花の咲く日に、尼の母に抱かれてきたといわれた。

くみの記憶では、尼の母の貌より、うす紫の花びらのかたまりが、紋柄のように光っていた桐畑の方が濃いようであった。笹谷家のまわりの桐は、どれも背がそろっていて、物心つく五歳六歳の頃から、母のことを思うと、桐の花が散った。長左衛門の伐った桐は、粟田部の桐屋へ売られ、遠い越後の町で、タンスや長持になるときいた。伐られるのは夏桐、冬桐とあるなかで、いつも花は散っていたのをおぼえている。長左衛門は、伐った桐を軒下に高く積み、小枝まで束にして、硬い殻をも丹念に千切りとり、べつの俵に入れて

貯えた。桐買いからややおくれて、紙漉き村からアクぬきの桐灰に俵ごと買い取ってゆく人がいた。桐は貴重な木で、捨てる所は一つもないというのが口ぐせだった。冬のさなかも、長左衛門は深靴を履き、雪をふんで、いちいち樹の肌をたたいて歩いた。その小柄な養父の姿も不思議と鮮明な記憶にないのである。

笹谷家で育てられて六年目に、くみの運命が変った。子がないとあきらめていたつなの太っ腹に、宿ったからである。八つの時、岩本の成願寺に出来た寺子屋形式の尋常小学校といっても、簡易科へ入っていたくみは、義弟の誕生をきいてびっくりしている。実子がうまれれば、他人の子を養うのは面倒と思われたか、養父の白い眼がつきささるようになり、ふだんから物言わずで笑ってばかりいたつなの態度も、その頃からどことなく、赤ん坊一辺倒に変ってゆくのがわかった。学用品の石版や石筆の代金を請求するのに気づかいを示すほどひねくれたくみは、長ずるにしたがって、自分から、養父母とのあいだに冷たい壁をつくるにいたった。

「やっぱり、おめは、岩本の子や。番の者になれや」

と長左衛門がいった。つなはそれに反対はせず、二年生まで行った学校をフイにして、くみは、岩本村の紙漉き屋倉持藤右衛門の番の者になった。

番の者とは、紙漉き村独特のよび名だが、漉き子になる前の、年はのゆかない子守り女の呼称でもあったか。今日でも、五箇の紙漉き部落へゆくと呼称だけのこっていて、番の者は、近在の味真野や粟田部から、遠くは美濃境の上池田や西谷の村からもきたという。貧しい家の子は小学校もロクに卒業できなかった頃の話である。義務教育法の施行されるのは明治十九年のことだから、この当時の地方寒村では、学校へゆかねばならない法律も、厄介なものだったようである。小さくは七、八歳から十五、六歳までの子が、番の者と

して、五箇の紙すき屋へ奉公にきた。どれもみなくみに似た貧しい子で、めぐまれない少女ばかりであった。岩本の倉持の家は、川の道から少し入りこんだ山よりにあった。少し高台だったので、軒場の下でコウゾの皮をむいていると、すぐ眼の下に破れ塀の円鏡寺がみえた。尼寺には、もう母の姿はなく、いつか、人眼をさけて塀外からのぞきにゆくと、背をまげた小柄な老尼が、白護襟に短かい猪首をつつんで、じっとこっちをみているのに出あった。くみは走り逃げるように小橋を渡って倉持の家まで息切らしてきたが、小猿のような貌をした老尼の眼が、長左衛門の桐の肌をたたいてまわっていた時の鋭い眼に似ていたので、悲しかったことをおぼえている。

母がどのような縁で父なる人の子を宿したか。どこにその頃住んでいたか。おそらくは、出家の身で子をなしたのだから師の覚円尼から勘当をうけたかして、岩本から身をかくしていたに相違ないけれども、養父母にさえ行方を告げずに去った母のことがうらめしく、それが、この頃から、くみの性格を奔放へかきたてる要因をなした。倉持の家の番小舎で、五人の仲間と一しょにくみは寝起きしたが、誰よりも変っていて、野放図な娘になった。大柄で色白で愛嬌もあった上に負けず嫌いだったので、十四歳で一人前の漉き子になった。倉持の家では、漉き子になってはじめて休暇がもらえたが、粟田部にかかった芝居を観にゆくより、桐の花の季節は、歩いて文室の養母をたずねた。もう、その頃はつなは昔のように肥っていなくて、男の子に吸いとられた痩せた頬骨の出た女となり、一人子を撫でるようにかわいがって、

「おめにおぶってもろた子がこんなに大きゅうなった……ほれや」

といって、養父に似て眼のつり上った子を、くみに自慢してみせ、歯をだしてわらった。くみにはこの世に、つなしか抱いてもらった記憶のある女はいなかったので、ふと、その子に養母をとられた気がして淋し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

くなり、実母の行方がききたいと、何げなく、訊ねてみたことがある。するとつなは、
「京の方へ行って還俗さんしたときいとるが……冷たいおっ母やで、会うてみても、なあんも楽しいことなんぞありゃせんね……」
といった。
「おめは、おらの子や。ほやほや、おめの籍はおらとこに入っとる。おめは笹谷のくみや……嫁にゆぐ時は、ここからゆかんならん。きばって紙漉きおぼえて働かにゃ……」
戸籍上の母だといわれたわけだが、それなら抱かれている長一は、何上の母なのだろうかとくみは羨しそうに、養母の顔を見た記憶がある。いずれも、みな、五箇の村が太政官札といわれる国の紙幣を漉いた直後のことで、桐の花の咲く味真野よりも、岩本の方が景気がよかったのだろう。紙幣の雨が降った時代に、五箇へ五箇へと、番の子が集まったのである。その五箇はいま私の佇んでいる文室の背山の向う側だから、桐の林にうすれて見えなかった。
文室の部落は、山裾に細長くのびていた。どの家も本瓦ぶきの大家で、昔の茅ぶきは少なかった。家のまわりに桐があり、作業小舎とおぼしい杉皮ぶきの、粗末な小舎、鶏舎、牛小舎の荒れたままに残っているのもみえ、村なかは人影もなくひっそりしていた。笹谷の家をたずねると、もうその家はとっくに無くなっていて、いまは、この村に笹谷姓をなのる家はないと教えられた。無理もない。明治は遠くなりにけりである。いまから百年近くも前の、桐買いの貧しかった家などたずねるのだからして、廃絶になっていたって不思議ではない。私がしつこく屋敷跡のことまで訊くものだから、村人はここらあたりに家があったはずだと、山裾の陽かげ地へつれていった。みると、そこは、なるほど、家があった様子だが、いまはなだらかな桑畑に

なり、長左衛門やつなが住んだ頃は、太い桐もあったろうに、その牛蒡畑も、裏の藪も、すっかり面貌をかえている。桑が枝をゆわえられて針のようにとがっているだけだった。しかたなく、文室を出て、私は五箇へ向った。

五箇は紙漉き村である。文室の谷のひらける五分市から、東へとって、約三丁ばかり歩いて、山の鼻へ出た。東どなりの鞍谷から、粟田部へ流れこむ鞍谷川をわたると、もうそこが五箇だった。いまは今立町と呼称を変えているが、不老、岩本、大滝、新在家、定友と五つの集落を抱いた大滝谷の呼称で、古くから、この五つの集落だけが紙を漉いた。

不老へさしかかる道は、むかし、くみが歩いた道だった。不老にも、岩本にも、定友にも、大きな製紙業者がいて、山を背に何本もの煙突がみえる。鉄筋の工場こそないが、煉瓦づくりの倉庫をもつ工場はすっかり昔と変っている。しかし、家や人は変っても、山と野の景色は変るまい。くみが、岩本の倉持家から文室へ往復した道は、舗装もなく霜柱ののこる山道なので、歩いていても、明治の風を吸う心地がした。岩本へぬけて、大滝へ廻ったが、古い大きな鳥居の下にきて足をとめた。有名な大滝神社であった。日本和紙の祖、川上御前をまつる氏神様で、鳥居の上にそびえる大杉の木立を仰ぐと、二千年前の紙漉き里の深さに接する思いである。

味真野の村なかに花筐の桜をつきたてて、都へ去った天皇が、まだ、この里に住んでいた頃だった。大滝川のほとりで、ひとりの美女に出あった。白かたびらに身をつつんだその女は、大滝川の清流を汲んで紙を漉く業を教えて、皇子の前から姿を消した。皇子はこの女の示した紙つくりを、村人に教え、はじめて、大滝に和紙がうまれた。古いこの伝説も、天につきぬける大杉の下に身を置いていると、信じられぬ話でもな

い。紙すきを教えた女は、いまも、この奥山に眠っている。

神社を出て、大滝川に沿い、円鏡寺をさがしたが、尼寺はたしかに川岸にあった。くずれた土塀はとりはらわれ、道からすぐ本堂がみえ、棟つづきに小さな庫裡もある。周囲がたてこんでいるので、通りすぎてしまうほどの小寺だが、よくみると、うしろ背に墓地があり、むら消えの雪に、古ぼけた石塔や墓石がよごれた頭をのぞかせている。この尼寺がくみの母の住んだ所かと感慨をおぼえて、訪うてみると、あいにく庵主不在だとわかった。しかたなく道を逆にもどって、岩本に至り、倉持の家をたずねた。この製紙業者は、まだ残っていた。川をわたって、成願寺のわきの坂をのぼりつめた高台である。

昔の家があったといっても、くみが働いた当時の倉持家ではなかった。末裔にあたる人で、倉持家も、浮沈のはげしい紙漉きを大正末期までつづけて、倒産したという。当時の当主であった藤右衛門の孫娘にあたる人が経営していたが、昔の面影は、ここでも新たにすることは出来なかった。

とすると、もう、くみや、くみの母のことを知っている村人にあうことは難しく、旅行の目的は味真野のひなびたたたずまいと、すっかり近代工業部落に変った五箇の村々を見ただけで終るわけであろうか。もとより、ぶらりと訪れた一日だけの日程で、明治の初期に生きた尼と、その子の紙漉き女の行方など、くわしくわかるものでもなかったろう。半ばあきらめて、帰路につきかけ、ふと、この五箇の村でもっとも檀信徒が多いときく岩本成願寺へいってみた。伽藍も昔のままの大寺は、越前にはめずらしく時宗の寺で、連阿澄心の開基だった。古びた石畳を歩き、本堂のよこの、庫裡裏から、何げなく、うしろ山へつづく墓地へ足を踏み入れた。と、そこに、「紙漉き弥平」とよばれ、くみにとっては、忘れがたい紙すきひと筋に生きた人の墓がある。墓石は古び、御影石の肌には苔がはえ、いたって粗末なものだが、「上林弥平の墓」と字がよ

めて、裏面の彫字も、うっすら次のようによめた。

「上林弥平氏は、五箇製紙の中興の人なり。その技術や神技に達し、越前和紙の名を宇内にひろむ。氏は天保元年二月三日丹生郡国見村に生れ、十三歳より本村に来りて漉き子となり、よく艱難に耐え、業を修し、のち独立して漉き家を営み、生涯を本村の土に埋むといえども、終生妻をめとらず、孤独の裡にその生を閉じたり。我ら本日、その七回忌を迎うるに、墓石を建立して、永世に故人の遺徳を讃え、その霊を安めんとす」

上林弥平顕彰会員一同と刻まれてある碑文をよんでいると、私は、紙漉き弥平の生涯に、大きな影を印したはずのくみのことを哀れに思った。くみは弥平のもとで働いてきた漉き女であるが、弥平の蔭で消えていた。墓石をはなれて、庫裡を訪れ、折よく、参詣にみえていた岩本村の上条善左衛門氏に近づくことを得て、ここで、私は、上条氏からようやくくみの母である善照尼や、紙漉き弥平や、くみの人となりについて、くわしく聞くことができたのだった。

くみが、倉持家の漉き子をやめて、上林弥平の漉き家へ入ったのは十五の冬だから、明治二十年のことであろう。その当時は、まだ弥平は、倉持の家から程遠からぬ大滝神社よりの、山裾の一軒家にいて、細々と紙漉きに精を出していたという。弥平はその時もう六十にちかく、その生誕は、墓石によると天保元年となっているが、じっさいは、文政十一、二年ではなかったろうか、と上条氏はいい、明治以前の頃のことをおぼえている古老もいなくなったから、その頃の正誤を正すことも難しいといった。それにしても、くみには三人の娘がおり、この娘たちは三人とも、岩本、大滝、定友にあって紙を漉き、いってみれば、母の業をうけて、明治、大正、昭和を生きたという。三人のうち今日存命しているのは、長女のりつだけだが、いまで

も、粟田部にりつの家はある。私は、くみに三人の娘があったことは知っていたが、その娘のひとりが存命ときいて嬉しかった。

「りつさんにきいたことやら、わたしらが村の古老からきいたことをつなぎあわせてみますと、だいたいのことがわかります。けんども、まあ、いうてみりゃ、紙漉き弥平の名は有名ですけんども、裏側でほんとうの血汗をながして紙を漉いたのはおくみでしたんやね。弥平さんというお人は、自分の技術をなかなか人に教えなかった人で、それを、ひそかに体得したのは、おくみじゃったと思いますな。今日、京の本山にのこっております弥陀の舞の大壁画の紙も、みーんなおくみが漉いたもんでございますよ」

いわれるまでもない。紙すきはなるほど男よりも女の仕事といえた。男はコウゾを煮たり、煮あがったカミをたたいたり、乾燥したりはするけれども、肝心の紙はすかない。厳冬の冷水に、二の腕までひたらせて、塵をとったり、簀桁を振ってすくのはみな女であった。「紙漉き弥平」のほかに「西野弥平次」「岩野平三郎」など、この五箇村で名をはせた紙すきびとは多いけれども、いずれも男は漉き家の当主であり、経営者であった。じっさいに手を水につけて漉いたのは、番の子から大きくなった漉き女たちである。

「おくみは一生母親と父親をさがし求めながら紙をすいたといえますな。思えばかわいそうな子で、父親には会わずじまいに終りました。味真野からくる女の子らは、みな、どこやら、おくみに似て不幸な女が多かったと聞いとりますが……中でも、おくみは尼の子ですからまた特別の境遇じゃったと思います」

上条善左衛門氏のいうことは、私のこれまで調べてきたこととほぼ一致するように思われた。くみの薄幸さも、ひょっとしたら、味真野の「照日の前」の悲劇をうけてもいようか。いや、くみだけではなく、昔にも似た話はあった。摂津の国の名塩紙の祖といわれる東山弥右衛門は、摂津を出て奥美濃で樵夫をしていた

が、越前五箇に紙すき村があるときいて大山をこえ、ひそかに秘法を習得しようと村に入った。他国者をきらう漉き家で粒々辛抱して修行しているうち、味真野の番の女と結ばれた。土地の女を嫁にしたのなら、五箇の秘法を教えてもよいということになり、弥右衛門は、五箇和紙の製法をすっかり会得することになる。だが、嫁とのあいだに子をなして働くうち、摂津へ帰りたくなり、ある夜、ひそかに妻子を置いて出奔してしまった。摂津へ帰った弥右衛門は、越前紙漉きを村人に教え、さらに名塩の土の特質を利用して、「泥入り紙」を発案し、後世に名塩紙の名をひろめた。味真野に残された妻は、夫が摂津にいることを知って、子をつれて会いにゆく。名塩へついてみると、弥右衛門には妻もいた。村人たちの冷たい仕打ちにあって、会うことをゆるされない。悲しんだ末に、子と共に、名塩の村近くで狂い死にする。この哀話は、王子の紙業博物館出版部から出ている「紙碑」にも、詳細に記されているが、いってみれば、名塩紙の始祖の弥右衛門も、味真野の女のあと押しがなくては、秘法をおぼえて帰ることは出来なかったのである。私たちは、今日、越前だけでなく、諸国につたわる紙漉き村の偉人伝や、この道ひと筋に生きた職人の話をよくきくけれど、裏側にあって、本当に紙を漉いた女の話をきくことはすくない。

私が、この物語を思いたったのも、じつはそのような感慨も手つだったからである。とくにまた、こしの大山の北側にかくれた味真野の風物が、いかにもおだやかで美しいのにくらべ、歴史の下積みを生きた女たちが、私たちに馴染みぶかい国定教科書や紙幣や卒業証書などの紙を漉いて、味真野と多少ともかかわりをもっていたことが心に焼きついたからにほかならない。

味真野は、温かい山につつまれた村だが、悲話を裏書きするような万葉の頃の歌がまだ二、三ある。

「わが宿の花たちばなはいたづらに散りかすぐらむ見る人なしに」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.